

富永 春部 述

諸國郡郷考

畿内上

一

特31

418

727



大日本教育會館			
室		第	
	一		三
	三		一
三	三	五	一
冊	號	架	函

022540-001-9

特31-418

諸國郡郷考 卷之1-3 畿内

富永 春部/述

上

M8

ADB-0221



富永春部纂述

諸國郡鄉考

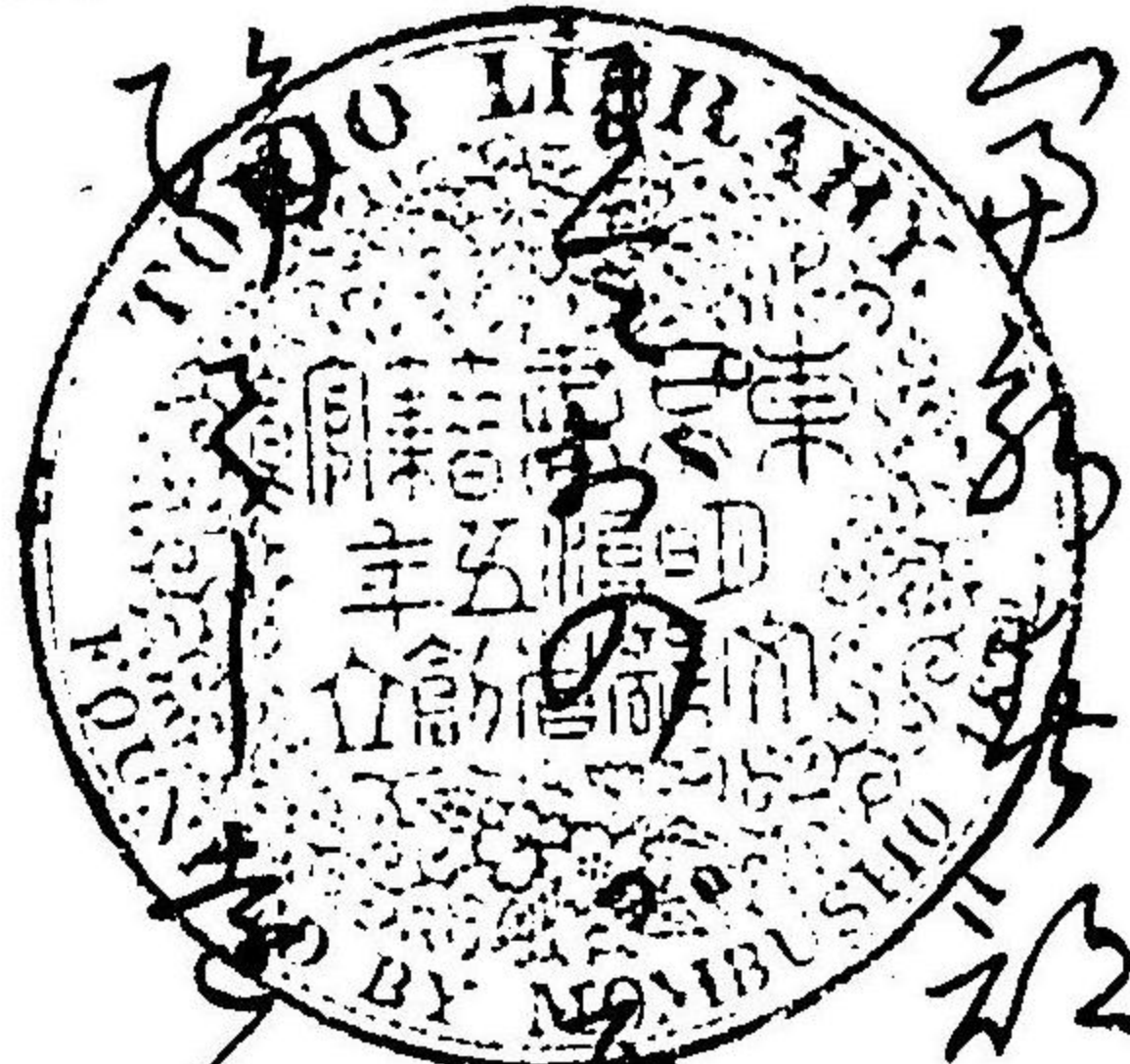
越後

明珠堂發元



東洋書局蔵

特31
418


 今迄の如く一巻にて
 明治元年圖書寮交付
 御座り申上。

今迄の如く一巻にて
 明治元年圖書寮交付
 御座り申上。

序

やぶらさる友ほし。やぶらさる友ほし。ゆるぎ
きあすらなふら。和名ある國郡郷の
名のなき。そのかき。そのかき。その
書らるる。そのかき。そのかき。その
むか。そのかき。そのかき。そのかき
ゆるぎあが。ゆるぎあが。ゆるぎあが。ゆるぎ
ゆるぎあが。ゆるぎあが。ゆるぎあが。ゆるぎ
ゆるぎあが。ゆるぎあが。ゆるぎあが。ゆるぎ

ゆるぎあが。ゆるぎあが。ゆるぎあが。ゆるぎ
ゆるぎあが。ゆるぎあが。ゆるぎあが。ゆるぎ
ゆるぎあが。ゆるぎあが。ゆるぎあが。ゆるぎ
ゆるぎあが。ゆるぎあが。ゆるぎあが。ゆるぎ
ゆるぎあが。ゆるぎあが。ゆるぎあが。ゆるぎ
ゆるぎあが。ゆるぎあが。ゆるぎあが。ゆるぎ
ゆるぎあが。ゆるぎあが。ゆるぎあが。ゆるぎ
ゆるぎあが。ゆるぎあが。ゆるぎあが。ゆるぎ

序

二

こはつごとの。明らふ治まけるかたはつごとの
し。りま清とほえさうの。なまこやこ定ま
るつふ。を代田のこきまの市イハにヤれやどりのま
まよーるまつ。

近藤昔村

諸國郡郷考序



日月星辰繫乎天亦山川郷邑
膺乎地二者之形動靜不同而
其名則動者未曾變而靜者有
時乎變其初變也口碑傳之夫
藉紀之及其久轉傳訛誤茫乎
難詰考古出本逐名求實就令
推古多方求索

如求唐子豈有力者疲半負而走
乎徒發亡羊之嘆而止夫郡鄉者
戶口之登耗關焉貢稅之多寡繫
焉何可附諸不可知而止苟有耽
古而博涉者原始要終優柔以求
之則安知無有始之求而不得者
今則忽然而至向之沒而不顯者

今則躍然而出乎特病未得其人
焉瓦如吾富永好問豈非所謂其
人耶好問夙攻國藉竅覃思於罷
黜沿革自史傳地誌至紀行和歌
稗官野乘博蒐彙搜挈確證訂訛
傳佔羝鄉考十五卷孝鏡精覈晦
者以顯閔者以露譬之弱喪之得

再歸故里不亦愉快乎頃日其嗣
子準清攜過吾廬致先人易簣之
言曰予夙理國藉多所撰述无儲
精於是書汝校訂畢業齋桓各故
久村果乞序刻以廣其傳噫好問
逝矣憶予曾與好問俱事先師綾
瀨翁於楓江也佳書同繙奇文俱

賞其北歸先師為設宴餞之相與
言志歡飲達旦朱師樂甚好問賤
詩留別予作序送之期與香為事
如昨日僕指尺廡二百二十甲子
矣而先師墓木已拱好問亦不可
復見而當時同遊之存蓋十隸一
二又曷勝山河之歎矣好問才識

優贍博涉墳籍奉先世遺業精究
眼科已能醫盲於目者又曰所得
之餘併能醫盲於心者家素富賁
喜賄人窮厄惠溢鄉曲名噪北陸
可謂能償其志矣而予剝才迂識
暗時之所向吾背出人之所棄吾
取之遭值恒艱萎茶不振今也耄

且及之一無所為愧師友實多今
欲序好問所著搦管而輟者數矣
顧已負昔者所與期豈可又負其
易簣之言乎抑方今大運斯復
皇天隆興務覈名實百舉維新郡鄉
之名亦復乎古者有之變乎今者
有已吾復安知不後之視今猶今

皇

之視古耶因書以論後之繼斯者
明治二年己巳仲冬

東京金陵芴墅堽育撰



半額中根聞書



越能國の道乃尻頸城那

神田郷なる富永正吉部ぬ

を知くより我方より文かあり

志くしむるに

あつたむに

あつたむに

やまこゝありらんゆくりまゝ
 身うせらゆしり今乃
 準清ぬらり告らぬし
 い〜あぢゆきそ若友よを
 らぬ〜きむらうしありし
 子よあせ〜ゆし能化ら
 らぬ〜あをぬきこゆ〜

らぬ〜のよきゆ〜りしゆ
 らぬ〜ゆき〜ゆのそ人の者
 らぬ〜事〜もゆ〜ゆ〜
 らぬ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
 らぬ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
 らぬ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
 らぬ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ

教さしふありれあししく
くちをいさひさしよぞありさ
おのれ若うりし世に諸國若義
考二冊ありてあはるるせ
つねどたる國号のよみて郡郷
村里よいつ福ハ縁ゆくはも
いと強くしそハナハあり

ぬれどやろあしと道草し
はらう縁やうぬる縁らのあし
いそごととあきいおみいそ
あでのふりそあしあええられ
あしあしあしあしあしあし
あしあしあしあしあしあし
あしあしあしあしあしあし
あしあしあしあしあしあし

あゝそゝぬゝ時やまぬゝと
新び取りの物ゝうけ
さばうけをぬゝととらぬ
あんがらぬゝくちをゝく
とひぬくゝたの流もぬゝと
人もゝぬゝゝいゝゝせん
ちかゝみとぬゝとぬゝと

半あめ

新編



例言

此書は先考のまづら抄出で地名のゆゑよし
を記さしし。和名抄郡郷の考あり。たゞこれのみ
ならぬ。本書を悉く校正して。魯魚をたゞし。名義
を解むとせらしむ。いとしき大業あり。其
志のまにて。此部をたに全まく事畢まひて。とほら
れしらば。おのれ準清。そ字紹つき述ぶむとける物か

ら。學淺く識うひくて。世におほやげにさんの資
に乏しく。空しく蠹魚のひとらとあし果むとい
るか。いとらあしくて。再ひ校訂して。板に彫らし
つるにあむ。

引用の書。延喜式ハ民部式兵部式など。令義解は
令。或ハ義解。日本紀は神武紀仁徳紀など。記し。
續日本紀ハ續紀。日本後紀ハ後紀。續日本後紀は

續後紀とくま。諸國風土記。諸國名勝志。伊呂波
字類抄。和字正濫抄。源平盛衰記などの如き。とな
單に風土記。名勝志。字類抄。正濫抄。盛衰記とやう
よ。記せり其外引書も。これハ准へて見るべし。
下よ訓注あるハ。傍らよ訓を付けど。また疑を
くおほゆるをば。とな訓を缺ちり。
先考の友人に聞れし説をば。となその姓名を載

せたり。されども、其人の著書の中ふ見えて、今あ
らそり世所行たるゝをば、その書名を更ふ舉げ
ぬ。

今按としたるは、とな先考の私断されど、たましく
今案の字を洩せざるあり。その行文ふよみて、知
るべし。

一人みして、巨多の郡郷を搜索せるふとよみて、純
謬なき事あたはぬ、後よとん人、教示したまふこと
とあらむ。幸ひ何らあるは、是にしくべき。

明治三年庚午春三月 男 準清 謹識

諸國郡鄉考目次

卷之一 畿內 上

山城 郡三 鄉三十三

卷之二 畿內 中

山城 郡五 鄉四十五

大和 郡十五 鄉八十九

卷之三 畿內 下

河內 郡十四 鄉八十

和泉 郡三 鄉二十四

攝津 郡十三 鄉七十八

卷之四 東海道 上

伊賀 郡四 鄉十八
伊勢 郡十三 鄉九十四

志摩 郡二 鄉十四
尾張 郡八 鄉六十九

參河 郡八 鄉六十九

卷之五 東海道 中

遠江 郡十三 鄉九十六
駿河 郡七 鄉五十九

甲斐 郡四 鄉三十一
伊豆 郡三 鄉二十一

相模 郡八 鄉六十七

卷之六 東海道 下

武藏 郡二十一 鄉百十八
安房 郡四 鄉三十二

上總 郡十一 鄉七十六
下總 郡十一 鄉九十一

常陸 郡十一 鄉百五十三

卷之七 東山道 上

近江

郡十二
鄉九十三

美濃

郡十八
鄉百三十一

飛驒

郡三
鄉十三

信濃

郡十
鄉六十七

卷之八

東山道下

上野

郡十四
鄉百二

下野

郡九
鄉七十

陸奥

郡三十六
鄉百八十八

出羽

郡十一
鄉七十一

卷之九

北陸道

若狹

郡三
鄉二十一

越前

郡六
鄉五十五

加賀

郡四
鄉三十

能登

郡四
鄉二十六

越中

郡四
鄉四十二

越後

郡七
鄉三十四

佐渡

郡三
鄉二十二

卷之十

山陰道

丹波

郡六
鄉六十八

丹後

郡五
鄉三十五

但馬

郡八
鄉五十九

因幡

郡七
鄉五十

伯耆

郡六
鄉四十八

出雲

郡十
鄉七十八

石見 郡六 鄉三十七

隱岐 郡四 鄉十二

卷之十一 山陽道 上

播磨 郡十二 鄉九十八

美作 郡七 鄉六十四

備前 郡八 鄉五十一

卷之十二 山陽道 下

備中 郡九 鄉七十二

備後 郡十四 鄉六十五

安藝 郡八 鄉六十三

周防 郡六 鄉四十五

長門 郡五 鄉四十

卷之十三 南海道

紀伊 郡七 鄉五十五

淡路 郡二 鄉十七

阿波 郡九 鄉四十六

讚岐 郡十一 鄉九十

伊豫 郡十四 鄉七十二

土佐 郡七 鄉四十三

卷之十四 西海道 上

筑前 郡十五 鄉百二

筑後 郡十 鄉五十

豐前

郡八
鄉四十三

豐後

郡八
鄉四十七

卷之十五

西海道 下

肥前

郡十一
鄉四十四

肥後

郡十四
鄉九十

日向

郡五
鄉二十八

大隅

郡八
鄉三十七

薩摩

郡十三
鄉三十五

壹岐

郡二
鄉十一

對馬

郡二
鄉九

通計六十八國

郡五百九十二
鄉四千三十九

諸國郡鄉考卷一

越後

富永春部纂述
男準清校

畿内上

義解畿猶疆也言王畿之内○續後紀承和三年十月承前之例畿内國次以大和國處

之第一勅宜據新式改之以山城國處之第一○民部式畿内とも五畿内ともありまゐる畿内の外を

畿外諸國とあり○北山鈔畿内宇治都久仁

山城 夜萬之呂國

式後紀延暦十三年十一月詔曰此國山河襟帶自然作城可制新號宜改

山背國爲山城國○拾芥抄山城國元山背○諸社根元記夫山城大和河内和泉攝津此五ヶ國を畿内といふ

中よも山城を北へ忍げ出々残る四ヶ國の後よある
地形なれハ元を山背と書て山しつと讀たるよや今
按名義ハこの説の如くあらんら背を城とかくを山
河襟帯自然作城とあるよ依て古へよりはやく城を
志呂ともいひしゆゑよ當られたる字なるへし松の
落葉よ山背の名を山城とらへ給へる也制新號とあ
るハ文字のよもあらは稱號もかはれる也城を之
呂とよめるとハ古書よなしといへるをひふこと也
既よ出雲風土記能義郡野代神社神名帳よハ野白神
社とあるを此抄よを野城郷とせるを以て知るへし
○本朝通紀黒川氏云凡山城國東北環近江若狹西南
連丹波攝津河内大和伊賀而西北枕山嶽之險東西帶
洪河之阻地勢廣濶風氣和暖田宅豐饒而四民安逸也
平安城巍然立中土前朱雀後玄武左青龍右白虎四神

相應萬世不易之地也○國造本紀以天一日命爲山代
國造即山代直祖○又山城國造樞原朝御世阿多根命
爲山代國造また山背國造志賀高穴穗朝御世以曾能
振命定賜國造かく山背と山城を別所のことほよした
るをいふらし○朝野群載陰陽道祭使和邇塚會坂塚
大枝界山崎塚右今月廿七日爲祭治部外四所鬼氣差
件等人宛使發遣天曆六年六月廿三日○康富記賢德
二年五月二日今夜四角四塚祭被行之皇屋四角良巽
坤乾塚外四塚會坂大枝龍華山崎○山城南勝志和爾
龍華ともよ山城國北塚也和爾ハ龍華の北にあり龍
華を山城近江の塚よ山城峠あり其北よ椽生村あり
龍華椽生と云此村の東也會坂ハ東塚大枝ハ西塚山
崎ハ南塚なり○類聚三代格寛平七年十二月三日官
符日應禁止五位以上及孫王輒出畿内事但山城國內

東至會坂關南至山崎與渡泉河等北涯西至攝津丹波等國堺北至大兌山南面不在制限○凡錄式大式上者延喜式定國大小者以下倣之今案戶令曰凡郡二十里以下十六里以上為大郡凡戶以五十六里八百一十二里為上郡六百八里以上為中郡四百六里以上為下郡三百二里以上為小郡而國有四等曰大曰上曰中曰下蓋亦以戶口多少定其等也故其管僅四郡而有上者有中者有下者其管十餘郡而有上者有大者其所統郡大小不同也

源唱朝臣為方之時奏明以河陽離宮為國府

拾芥抄源唱朝臣為重任之時河陽離宮為國府○朝野群載自山城國與渡津浮巨川西行一日謂之河陽往返於山陽南海西海三道之者莫不遵此路○類聚國史弘仁十年二月遊獵于水生野日暮御河陽離宮水生村窮

乏者賜米有差○續後紀承和十二年二月行幸河陽遊獵○三代實錄貞觀三年六月七日山城國奏言河陽離宮久不行幸稍致破壞請為國司行政處但不廢舊宮名行幸之日加掃除許之○又元慶五年正月太政官下符山城攝津等國備前伊勢齋內親王來二月二十二日首途自大和道經山城河陽宮到攝津難波海解除○本朝文粹河陽則介山河攝三州之間而天下之要津也自西自東自南自北往返之者莫不率由此道江以言見遊女管八國より管せる郡八ありよし管今も八郡なり田八千九百六十一町七

段二百九十步正稅公廩各十五万束本稻五十万四千七十九束三把雜稻二十一万四千七十九束三把

今按正税ハ田租也令義解ニ新輸日租經貯日税と見え
 えて租税同物なり公廩ハ國衙入用の稻穀也本稻ハ
 口分田所輸の租稻よて或ハ當年ニ京ニ上ル租或ハ
 後年まで貯ふる税をひとつといへる名目也雜稻ハ
 口分を除きて諸田よて出ル所の稻也賦役令ニ地租
 及雜税とありて雜税の義解ニ出舉稻今按米穀を貸
 出ル米といふ及義倉等是也とあり租の經貯せると正税と云
 此外ニ種々の名目ありて主税式所謂國分寺料文珠
 會料衛卒料修理官舍料池溝料救急料公廩の類皆雜
 税なり此正税雜税と出舉次ると出舉稻といふまた
 義倉の類
 乙訓於止久邇
 拾芥抄府とあり河陽離宮と
 丹波五女イナノメ納於掖庭第五日竹野媛唯竹野媛者因其形
 醜返於本土則羞其見返葛野自墮與而死之故號其地

謂墮國今謂弟國訛也○繼體紀十二年三月遷都弟國
 ○名勝志富郡東限桂河下流南限淀河西南限水無瀬
 河西限出羽村川
 北限丹波龜山路
 葛野加止乃
 續紀大寶元年四月甲辰
 山背國葛野郡○後紀延
 曆十二年三月幸葛野巡覽新京十三年十月遷都詔曰
 葛野乃大宮地者山川毛麗久四方國乃百姓乃參出來
 毛便之云云○歷代編年集成西京葛野郡又謂右京○
 拾芥抄左右京限以朱雀中央○本朝文粹余二十年以
 來歷見東西二京西京人家
 漸稀殆幾幽墟矣慶保胤
 池亭記
 愛宕於多岐
 郷名より出
 紀
 伊岐宇治宇知
 郷名より
 出たり
 久世久世
 郷名より出たり○
 續後紀天長十年山
 城國久勢郡○東大寺奴婢籍帳山城國久西郡紀里戶
 主水尾君眞熊戶口云云○風土記殘編東西十三里東

限長野川西限藤岡南限百舌鳥原北限小川當郡川多山少民家富有而出竹木奇沙

綴喜豆々岐

郷名より出たり

相樂佐加良加

郷の部よいふへい
ま佐加良とよへり

乙訓郡

山崎夜未佐岐

兵部式山城國驛山崎二十正○後紀弘仁二年閏十二月遊獵于水生野御山崎

驛○類聚國史弘仁四年二月遊獵于交野以山崎驛爲行宮五年二月遊獵于交野日暮御山崎離宮○三代實錄天安二年八月令山城國司警護宇治與度山崎道以東南西三方通路之衝要也又云仁和二年二月山城國山崎津頭失火延燒居民廬舍數十宇○日本紀畧天祿三年閏二月山崎津岡亂事出來中矢之者三人○明月

記建永元年六月自去夜入列卒於山崎山被道麋鹿已一點出御了○帝王編年記仁德天皇十一年十月堀難波江築茨田堤今山崎河通海是堀江也○土佐日記々ふのようさりつかた京へのほるはいとよこれ山崎のこひのともまかりたおほちのかたもかいらさりたりこれ山崎ハ京よ入るの道也○雜式山城國云云山崎橋攝津伊賀等國各六枚播磨阿波等國各十枚板敷○行囊抄山崎ハ庄ノ名也○大安寺資財帳山背國三處乙訓郡在山前郷○爲尹郷千首河時雨山さきやむらひの雲たむらハ淀の河瀬よ時雨來よりり
○柴田退治記羽柴筑前守秀吉者天正十年十月十五日相勤將軍御葬禮以來帝都坤角山崎上拵一城見下五畿内相鎮生民○諸國廢城考山崎城○諸州巡覽記東寺より山崎へ三里其間唐橋桂の里かたら川向日

明神を過く今案土佐の南のかる島坂ハ向日

鞆岡度毛乎賀

名勝志下海印寺村巽圓明寺村西

北有鞆岡村土人ともかよ云○行囊抄自路右ニアリ今里俗ハトモカト稱ス此所ハ催馬樂ニウタフ名所

ナリ此邊ヨリ右長法寺村粟生光明寺長岡ノ舊都ハ小鹽山大原山ニツキタリ乙訓郡大原ノ内あり○

梁塵秘抄このさゝといつこのさゝそとぬりらるとしよさふれるともをらぬさゝ○枕草紙ともをらぬ

さゝぬおひたる

長井大江於保江

朝野群載山城國四境大枝塚西塚也○

園大曆觀應二年正月或人云北手自於伊山入來又南方合戰以外也京方勢引退鳥羽邊○諸陵式大枝陵贈

大皇太后高野氏在山城國乙訓郡兆城東一町一段西九段南二町北三町守戸五烟○續紀延曆八年十二月

葬於大枝山陵上謚曰天尊知日之子姬尊皇太后始和氏諱新笠贈正一位乙繼之女也云云生今上早良親王

能登内親王寶龜中改姓爲高野朝臣○名勝志按大江の山越乙丹波國龜山の通路として山城國七道其一

也此山よ登る坂路あり大江は坂と云峙よ地藏堂あり大江の地藏といふそれより西よ下るとと一町余よ

して山城丹波兩國の境あり然もハ大江山之山城の内ありをいされとも三十八帖歌枕其外名所集等と

ふ丹波は國よ入あり和名抄大江郷山城國乙訓郡よ入り後人これと詳らふよ

郷もあし大江の坂の麓よある沓掛村塚原村など此郷の内ありへし○閑田耕筆山城丹波は塚原の西

よ俗老の坂と稱ふるものあり大江山は坂を誤るなり和名抄乙訓郡大江とあり慈鎮今案新古今集慈和

尙於歌了也(大江山)ふるあく月けさにて鳥羽田の面よ落るるりらぬとあると是あり云云又丹波の堺ふるものも酒天童子といふ賊のこもりし所にて今千丈ヶ嶽といふ大江山いくのゝとちの遠をれとと小式部内侍れよとし其母和泉式部保昌朝臣よるくひて丹後にありしほとふれえそふるふること

物集毛豆女

皇崩千淳和院戊子奉葬後太上天皇

於山城國乙訓郡物集村御骨碎粉奉散大原野西山嶺上八名勝志之内大原山陵淳和天皇陵歟文德實錄○今按物集村在向明神西北寺戸村北節用集物集女と書たり大平記これよおひし○出觀集よし山乃もつめにこもりたまへるところ云云○正祿間記西の岡よて鶏冠井同物集女云云○行囊抄鶏冠井村路ヨリ左ニ在

原村自路右物集村自道右極原村ニ並テアリ○仁和寺諸堂記紫金臺寺此御堂初者被立西山物集庄其後

被渡此寺訓世郡勢萬葉集一開未代來背若子欲云余境內畢○名勝志今有上訓世下訓世二村

○後紀弘仁六年六月山城國乙訓郡物集國背兩鄉雷風環百姓廬舍人或被震死先是大蛇入人屋即殺之未

幾其人被震○蜻蛉日記山城國久世ニカホト榎本ニカホト二十二社注のみやけといふ所ふとまり云云式春日社小

神御在所條白榎本社一町西祓戸明神○名勝志引三銘寺雜々文書云右大臣家政所下鶏冠井殿寄人沙汰

入等文云榎小田里羽束波豆賀之神名式羽束師坐高蓋榎本郷同所歟御産日神社○内膳

式園神祭十四坐中羽束志園三坐○續紀大寶元年四月勅山背國月讀神擇井神木島神波都賀志神等神稻

自今以後給中臣氏○三代實錄貞觀元年九月山城國
月讀神木島神羽束師神木主神捧井神和伎神等遣使
奉幣爲風雨祈焉○東大寺奴婢藉帳山城國羽東里戶
主長岡坂本國磨呂戶口羽束案○方丈記嶺よよら
のかりて遙よ古郷に空を望み木幡山伏見の里鳥羽
羽束師をとれ○太平記羽束使○盛衰記維盛等都落
東寺四塚造路御吉野志賀柳原淀津羽束六田河原ヲ
打過ヲ云々今按この御吉野六田河原ハ○後撰集忘
られたる思ふ歎れをるをや身をまつらしに森とい
ふらん○續拾遺集をくして袖や志をせん數あふ
忍身をまつらしに森の翠を成○金葉集家の風ふら
忍ものゆゑまつらしに森のりのことの葉散らし流る
らぬ輔題○吉野詣記水無瀬より興よて歸りふらりえ
つらしにをりたをりよてとしをたてたる○名勝

志古河村北有羽束師森按羽束師郷今古河村邊歟自
久我村半里許南也○行囊抄羽束師杜神社アリ羽束

石大明神ト云下鳥
羽ノ西南ニアリ
石作以之都久利
後紀延曆十一年
十一月幸高橋津

便遊獵于石作丘○三代實錄貞觀元年正月奉授正六
位下石作神從五位下○又元慶三年閏十月勅以山城
國乙訓郡公田五町爲元慶寺田而四段三百十六步返
入石作寺○立蕃寮式凡近都諸寺東拜志以北西石作
以北停預講師僧綱檢察拜志寺在紀伊郡○空穗物語
かくていし流くりてはやくしほとげらんし給ふ
とてねほくは人まうて給ふ○續古事談藥師佛を流
くり奉りて丹波國石造寺よ流し奉り又石造寺
に藥師靈驗に佛ありそれよ祈るをし名勝志按續古
石造寺者誤字津保物語屬山城但石作郷○諸陵式石
近丹波故誤爲丹波後人傳寫重妄者手

作陵贈皇后高志內親王在山城國乙訓郡埴城東西三町南北三町守戶五烟○今按此氏錄火明命六世孫建興利根命之後也垂仁天皇御世奉為皇后日葉酸媛命作石棺之仍賜姓石作大連公也此氏人住たる所なる

葛野郡

橋頭

今按とあるハヒツノと訓をさる万葉集九見河内大橋獨去娘子歌の反歌大橋之頭爾家有者心悲久獨去兒爾屋戶借申尾とあり橋頭郷今さたらふとあり

大岡於保乎加 綱紀天平十七年二月天皇備駕欲幸大丘野○諸陵式大岡墓桓武天皇夫人從三位藤原氏在山城國葛野郡大岡郷守戶一人○

扶桑略記寬平十年六月廿六日是日差遣宣命使於藤原夫人墳墓在葛野郡西山依天下疫御占之處西方之

女墓有穢物祟之由即遣左右看督長尋認其地今日遣使又下山城國始令置守陵人

山田 名勝志今上山田下山田トテ松尾社南北里アリ松尾社モ山田庄也

川邊 加波乃邊 不詳 葛野加度乃 類聚國史光仁天皇寶龜十六年八月齋內親王被于葛野川入野宮又弘仁四年八月幸葛野川○西

宮記堤河葛野 川島加八之末 名勝志今下桂村西有河島村○日本紀畧昌泰元年十月太上皇遊獵上皇騎御馬出自朱雀院至川島始

命獵騎日暮宿赤日御廚○太平記桂川ヲ渡リ河島ノ南ヲ經テ物集女大原野ノ前ヨリ寄タリ○園太曆觀

應二年正月今朝差西沒落欲籠香山寺城之處於伊山

敵切塞不通仍逗留桂河西河島邊○諸陵式河島墓贈
正一位富麻氏在山城國葛野郡墓戶一烟○長享年後
兵亂記天文十一年十月五日上野立
蕃河島城攻同六日至大將軍討死
上林加無都波也

之類聚三代格貞觀十四年十二月官符云應充正一位
平野神社地一町事在山城國葛野郡上林鄉九條荒

見西河廿四坪四至東限荒見河南限典藥寮園西限社
前東道北限禁野地○名勝志引北野御託宣記云天滿

天神宮創建山城國葛野上林鄉右イナハラ類聚國史弘仁
京七條二坊十三町今按此郷内歟七イナハラ標原四年十月遊獵

標原野○三代實錄元慶五年九月山城國葛野郡標原
鄉野地三町賜興福寺傳燈大法師位修審先是修審申

牒此地元嵯峨院四至之内也貞觀六年申督淳和院建
立道場定大覺寺四至之内還爲公地○惠慶法師集人

とんるともふいちハノ野ノ子日トふた葉ふる乃
ハの小松よことよせて木高くふる陰をこそまて

○著聞集鞍馬まうてのもの、夕くれよいち原野を
過ぐるよ忍び人よ逢うきたるものハきとられき

をひつ侍ると人おかたを聞て慶筭らよみ侍り
ふる夕くれよいちハノのよおふきハくくはる

れとやいふふるらん○今も
鞍馬路よ標原野とよめ處あり

高田東大寺古文書よ
讓與私領田地事

合壹段者在高田道祖神前○名勝
下林之毛都波也之
志今高田村在大井川東太秦坤

名勝志今下林村在河島村南此地有蓮生寺今建
仁寺末寺也有蓮生法師塔是宇都宮入道墓歟
縣代

不詳
田品多無良
名勝志仁和寺邊歟○文德實錄天安二
年九月大納言安部朝臣安仁率陰陽權

助滋岳朝臣川人助笠朝臣名高等至山城國葛野郡田
 邑郡真原岳名與原今點定山陵○三代實錄天安二年八
 月廿七日文德天皇崩於冷然院新成殿九月葬於真原
 山陵送終之禮皆從儉約十二月詔改真原山陵為田邑
 山陵奉充田村山陵陵戶四烟○前皇廟陵記田邑鄉真
 原岳今廣野是也在葉室山南村名廣野村西皆山也山
 下有寺號地藏院東野有陵故廣野亦號陵村○名勝志
 田邑陵法金剛院邊歟○諸陵式田邑陵平安宮御宇文
 德天皇在山城國葛野郡桃城東西四町南北四町守戶
 五烟○又云光孝天皇在山城國葛野郡田邑鄉立屋里
 小松原陵戶四烟四至西至芸原岳南限大道東限清
 水寺東前皇廟陵記ふり東の北限大岑○扶桑畧記葬山
 城國葛野郡後田邑陵一云小松山陵○皇年代私記葬
 小松陵號小松帝○江次第後田邑仁和寺西大教院良

○拾芥抄後田邑光孝天皇在仁和寺大教院丑寅○前
 皇廟陵記今失田邑立屋芸原等名清水寺亦滅非東山
 清水寺小松原今稱松原地存其名耶在平野西○又云
 古仁和寺所在之地號本寺野其後在雙丘西近年更造
 仁和寺于本寺野大教院地不可知今仁和寺
 西行鳴瀧道上有小丘人謂之光孝天皇陵

愛宕郡

蓼倉多天久良

山州名跡志愛宕郡糺所名ナリ下賀茂
 十有今出河口東北二町許云々此所

古ノ蓼倉也○名勝志蓼倉下鴨東北地高野川西也○
 小右記蓼倉鄉寬仁二年十一月奉寄賀茂下社四鄉內
 ○野府記長元四年七月永圓僧都所送蓼倉尼寺司申
 文調度文書等遣頭辨許○永享年中寺社文書山城國

菱倉社○神名頭注三井三身社也本緣見風土記賀茂武角身命也又云菱倉鄉三身社稱三身者賀茂武角身命丹波伊可古夜日女玉依姬也三神身坐故名三身社今漸云三井

栗野久留須

名勝志引和名

抄云栗栖鄉愛宕郡鷹峯東有御栗栖野今西賀茂南○三代實錄元慶六年十二月愛宕郡栗栖野○小右記寬仁二年十一月官符可奉寄賀茂上下社鄉之事下社栗栖野鄉四鄉內又云至栗栖野鄉有探下社葵之山仍為下社分○源氏夕霧隨身ふとのことふはとる以野さうぶらゝらんま草ふととにかせせ花鳥餘情此治郡すれ庄ちり小野栗栖野有そきをいふ所ありまふす○類聚國史延曆十四年十月遊獵栗栖野○明衡往來明日紫野見物可候御車且又於栗栖間可聞郭公也○三代實錄貞觀十六年八月大風雨權律師法橋上人位宗叡

預造御願寺在山城國愛宕郡栗栖野堂舍顛覆佛像元在北山高岑寺貞觀十三年大雨水自然以大巖石塞其道路行人不通去高岑寺移立於栗栖野○主水式山城國愛宕郡云云栗栖野一所土坂一所賢木原一所同郡石前一所とあゝみ愛宕郡内の氷室也○名勝志今西賀茂西山千束村北有氷室村有氷室明神社并氷池古跡是栗栖野氷室乎○續後紀天長十年九月天皇幸栗栖野遊獵便幸綿子池令神祇少副從五位下大中臣朝臣磯守放所
上栗田阿波多 姓氏錄山城皇別栗田朝調發隼拂水禽 臣○名勝志引和名抄云愛宕郡有上栗田鄉下栗田鄉二鄉今栗田口其遺名也中世又號北白川其白川亦至于今淨土寺村北為一村名而已○又云京之東郊曰栗田鄉此古鄉名也中世其稱更為白河因水名也白河名亦廢而今三條有栗田山

淨土寺村北有白河村其遺跡僅存矣○又云上下粟田
郷共屬愛宕郡粟田山屬宇治郡今從三條白川橋迄山
際號粟田口通江州大津驛○山陵志京之粟田中世名
改爲白河今又別爲一村白河村一山粟田山○三代實
錄元慶四年十二月四日太上天皇崩於圓覺寺時春秋
三十一自遜皇位御清和院云々俄而入丹波國水尾山
定爲終焉之地七日夜西四刻奉葬太上天皇於山城國
愛宕郡上粟田山奉置御骸於水尾山上○前皇廟陵記
上粟田山今北白河勝軍地藏山耶白河屬上粟田郷○
元德二年三月日吉社並叡山行幸記元亨三年二月五
日寶幢院の衆徒西坂本よ發向して養父里一乘寺以
下は在家悉燒傷らひ云云藪里ハ粟田郷のうも鴨社
領あり々々大野オホノ名勝志引賀茂氏人注進畧記云大野今
れえ云云大德寺領○後紀延曆二十三年八月遊

獵子 下粟田 三代實錄元慶四年二月山城國愛宕郡下
粟田郷百姓口分田四町二段九十五步奉

充中 小野乎乃 類聚國史弘仁四年十月從四位下左中
官職 辨兼攝津守小野朝臣野主等言猿女之

興國史詳矣又猿女養田近江國和邇村山城國小野郷
○三代實錄元慶二年十二月山城國愛宕郡小野郷○
小右記小野郷賀茂上社領○花鳥餘情山城國小野
の里といふ所二あり宇治郡ふ小野里あり栗栖の小
野と云醍醐あり又愛宕郡ふ小野ありひえの山の西
の麓高野といふ所あり○辨引抄師説云西ハ松崎の
山より東ハ高野山の東の叡山の麓までと小野とい
ふ名所なり井蛙抄に見えたり高野村の東ハ小野島
といふ地あり此所ハ橋あり小野橋といふ此道とハ
小野繩手といふ田地の字よありてあるあり空穂物語

云住わたりたり其あたりを比叡坂本小野のわたり
 音羽川ちらくて瀧の音水のことあはれは聞ゆるふ
 り今高野の南の方より音羽川ありその水上ひえのや
 下さる音羽の瀧あり瀧の不動のある所よりのほろ
 道と不動坂といふ此外小野九郷とも大原九郷とも
 いひて又名所あり叡山の西塔より一里半ほど北へ
 峯より西へ小野山といふ名所也東叡山よて近江國
 の分ちり小野山は西のふもととある九郷の惣名を
 小野といふ大原といひても名所あり此外西山は大
 原野とて又同名あるあり小野九郷を戸寺八瀬上野
 戸寺大長瀬上野の北あり此所無瀧あり五草
 生此所の后居成て住給へ高倉野村此所清あり小弟
 子とれあり然れは山城國ふ小野といふ所三ヶ所あ
 り○名勝志比叡山西塔ヨリ北峯ヨリ西凡テ小野山

ト云北へ一里半許アリ嶺ヨリ東ハ近江國也小池の
 氷室上み見也○和訓栞小野毛人ハ山城國愛宕郡の
 小野里あり慶長十八年高野川の東涯より石棺を
 掘出せ墓誌の鍬金牌を得たり面は飛鳥淨御原治天
 下天皇御朝任太政官兼刑部大錦上と書し背は小野
 毛人朝臣之墓とあり今高野寶幢寺に納む惟喬親王
 の舊蹟も同じ小野宮と稱す今上野
 といふハ小野は内の上は野ふるし
 記別雷社領○類聚三代格寛平八年四月官符問山城
 國民若平朝臣季長奏狀併得愛宕郡司解併錦部郷百
 姓等愁狀併鴨河堤邊東西水陸田若干是已等口分
 事具圖籍ハ姓氏錄諸蕃漢錦部村主波能志之後也
 坂也佐加
 本朝神社考八坂郷今祇園也○本朝通紀貞
 觀十一年遷祇園於山城國愛宕郡○姓氏錄

山城諸蕃八坂造狛國人_之留川麻乃意利佐之後也。○
 續後紀承和四年二月從五位下菅野朝臣永岑言亡父
 參議從三位真道朝臣奉為桓武天皇所建立道場一區
 在_二山城國愛宕郡八坂鄉_一雖其疆界接八坂寺而其形勢
 猶宜別院由是道俗號曰八坂東院伏望限以四至別為
 一院置僧一口永俾護持許之。○諸陵式八坂墓贈正一
 位藤原氏在_二山城國愛宕郡八坂鄉_一墓地十町墓戶一烟
 ○僧綱補任抄延曆十七年十一月傳教大師創起十講
 會請七大寺名德十人為講匠今霜月會是也中納言坂
 上田村曆山城國愛宕郡八坂鄉造清水寺。○世諺問答
 祇園會の條我朝よてハそ仇のとのみことと、あらハ
 れ貞觀十八年よとくぞんの事ありて山城國愛宕郡
 八坂郷といふ所ニ神社を流くられるるあり。○二十
 二社注式朱雀院承平五年六月官符應以觀慶寺為定

額寺事字祇園寺在_二山城國愛宕郡八坂鄉_一地一町

鳥戶止利倍

河海抄引_二山城風土記_一云南鳥部里

稱_二鳥戶_一者秦公伊呂具的餅化鳥飛去居其所森今鳥部
 ○風土記引諸社根元記云伊呂具秦公用餅為的者化
 成_二白鳥飛翔居山峯伊奈利生_一遂為社名○拾芥抄法皇
 寺號_二鳥部野寺_一○文德實錄天安二年四月庚子是夜寶
 皇寺火俗名_二鳥戶寺_一金堂禮堂盡為灰燼內藏寮式并件
諸寺とある内は寶皇と見ゆ○今昔物語鳥部寺寶頭
 盧_二コソ極_一驗ハ御スナレ○榮花物語長保二年十二月
 十五日皇后定子道隆院后みとうまき給媛子同夜崩
 とりへの、南にちた二町をらまやといふもの
 を流くりて流いひちかどつきてこゝよちハしまさ
 せんとせさせ給みやまこと一二十五よふらせ給ふ
 ○後紀天長三年五月丁卯恒世親王薨今上第一皇子

母贈皇后丙子葬恒世親王於山城國愛宕郡鳥部寺以南山○扶桑畧記應德二年十一月八日皇太弟實仁親王薨年十九歲廿八日葬於鳥戶野○諸陵式中尾陵贈皇太后藤原氏在山城國愛宕郡鳥戶鄉陵戶五畑山四町五段四至東限谷南限田西限隄北限谷有山○又云拜志墓贈正一位大政大臣藤原朝臣總繼在山城國愛宕郡鳥戶鄉墓地四町墓戶一畑○三代實錄仁和三年五月勅以山城國愛宕郡鳥戶鄉捺原村地五町賜施藥院其四至東限德仙寺西限谷并公田南限內藏寮支子園并谷北限山陵并公田施藥院使等奏院所領之山元在彼村即是藤原氏之葬地也依元慶八年十二月十六日詔被占入中尾山陵之內○性靈集故贈僧正勸操大德影讚序春秋七十夏臘四十七以十日茶毘東山鳥部南麓便蒙引顯昭拾遺鈔曰鳥戶山者阿彌陀峯也其下云

鳥邊野○山城志絕頂曰阿彌陀峯麓曰鳥戶野其谷曰小松或曰松谷蓋舊葬地也今或爲佛刹或爲民居而墜

墓尚存 愛宕於多木 後紀延曆二十二年八月幸伊豫親王愛宕庄○諸陵式愛宕墓贈正一位源

氏清和太上天皇外祖母在山城國愛宕郡兆城東二町南一町西一町五段北一町五段守戶一畑○又云後々墓太政大臣贈正一位美濃公藤原朝臣在山城國愛宕郡守戶一畑○河海抄とよき桓武天皇平安城遷都の時此地を諸人の葬所と定らる見延喜遷都記とるしとる珍皇寺といふ寺とるつ弘法大師乃聖跡として今よ東寺に一の長者管領也字類抄珍皇寺即愛宕寺云此寺者山城國分寺弘法大師幼少之時相從慶俊僧都久住此寺○名勝志引寶物集云珍皇寺北母あるを八坂塔と云り然ると迄此寺地ありしや○花鳥餘情とよきといふ所今の鳥邊野ふり細注よとる

き今於六道是也名勝志六道在五条北建仁寺異
自珍大昌寺院本尊本弘正法儀東寺長者是依兼門下珍皇寺也今是出

雲以都毛在上下名勝志上下出雲寺下鴨邊惣而出雲

野神社名勝志高野在修覺院北八瀬高野抄寛仁二年十一月太政官符應以山城國愛宕郡捌箇

郷奉寄賀茂上下大神宮事御祖社四箇郷蓼倉郷栗野郷上栗田郷出雲郷別雷社四箇郷加茂郷小野郷錦部

郷大野郷○拾芥抄上出雲寺下出雲寺○宇治拾遺物語王城の北らといはれも寺○古今集もついで寺に

人のことしげるひ真せい法師の導師にていへりけることとを歌によみて小野小町かるとよつかいしげる

○東大寺奴婢籍帳山城國愛宕郡賀茂カモ社又賀茂御祖

神社又賀茂山口神社又賀茂波爾神社○姓氏錄山城神別賀茂縣主神魂命孫武津身命之後也○節用集上

賀茂下鴨○神社啓蒙去王都北半里許山麓有宮曰賀茂別雷神宮○風土記加茂健角身命宿坐倭葛木山之

峯自彼漸移遷至山代國岡田賀茂今按こは倭より此愛宕郡の加茂に遷り給へるとき相樂郡の岡田と云

所にまはし留まり給へるといへる也故に相樂郡にも加茂あり混ふへららひ○一官記鴨大明神號

下社大山咋父故號御祖山城愛宕郡賀茂大明神號上社大山咋神也號別雷母玉依姬武角身命女○續後紀

天長十年十二月道場一處在山城國愛宕郡賀茂社東一里許本號岡本堂是神戶百姓爲加茂大神所建立也

天長十年檢非違使盡徒毀廢至是勅曰佛力神威相須尙矣今尋本意事緣神力宜彼堂宇特聽改建○驥驢嘶

15
3
42

諸國郡郷考卷之一終

餘上加茂六郷本郷不入六郷中ニ岳本名ト云アリ其

ノヨリ菩薩池ノ邊岳本郷ナリ岳本郷小野郷邊ニ乘寺

河上郷氏神ヨリ上西大官郷中村郷己上六郷岳本

諸國郡郷考卷之一終

